

# 原告団

遺族・CO裁判、災害責任  
追及、特集号  
第二百十八号

## 原告団レポート

CO患者——  
光山 伊三郎さん

もらった。

「私は久留米市の手前、大善寺で生まれました。三善中学(現高校)を卒業し、専修学校から八幡製鉄に入社しました。だいたい入社時に約束した労働条件とあまりにも違いました。六カ月ほど働きましたが辞職しました。」

東京に出て日本橋の郵便局で働いていましたが、兵隊にとられ、中支に行きました。

昭和十七年に帰りました。また郵便局で働いていましたが、福岡の春日原にある飛行機の部品づくりにとられ、戦後も、しばらくそこで働きました。

## 生い立ち記

熊本県荒尾市のベッドタウン、八幡台二丁目三の六に、元宮浦鉦内機工、光山伊三郎さん(大正五年四月二十二日生まれ)の住まいがある。

光山さんは、戦前の記憶をほり簡単に入社までの経歴を話しておこなうが語る。



激しくたたかった昭和35年の夏。  
ホッパーを背景に(後列左端が光山さん)



退職の年、ひまわり社宅で。  
ミユキさん、美代子さん、貴代子さんと。

「当日、三善方でした。ドーンという音で眼がさめました。三川鉦の坑外で爆発があったらしいというのでした。」

## 臨時救助隊

「ミユキさんも働きに出た。家の炊事は子供たちが順番にした。一家総出で、差別と闘い、日々の生活を送りひらいていった。」

月十七日生まれ、四女悦子さん(昭和二十七年八月十三日生まれ)五女貴代子さん(昭和三十年六月二十三日生まれ)と、食べざかり、育ちざかりの子供たちが五人もいた。

## 治るまで面倒見るのが当たり前

## ずさんな救出作業指示

## 宮浦鉦から救助に入り被災

## 差別の日々

三池闘争後、就労するやいなや職場では差別配役がはじまり、職三女あけみさん(昭和二十五年四月十七日生まれ)、四女悦子さん(昭和二十七年八月十三日生まれ)五女貴代子さん(昭和三十年六月二十三日生まれ)と、食べざかり、育ちざかりの子供たちが五人もいた。

制による新労働加入への説得が毎日進められていて、入居時は完全に出来上がっていない。第二組合に乗り返すというので、「第二組合に乗り返すというので、誰に頼まれていたのか」と、声高にいった。



八幡台の自宅で話す光山さん。

「私は昭和四十六年に定年になり、退職金は二百五十万円しかありませんでした。土地を買って家を建てる状況ではありません。まだ治療を受けているのに、会社は社宅退居の要請を送ってきた。私は腹がたつて社宅事務所に行き、職制とケンカしました。」

## 生命の限り

「私は昭和四十六年に定年になり、退職金は二百五十万円しかありませんでした。土地を買って家を建てる状況ではありません。まだ治療を受けているのに、会社は社宅退居の要請を送ってきた。私は腹がたつて社宅事務所に行き、職制とケンカしました。」

「家は新築する時は、ずいぶん考えましたよ」と、ミユキさんはいう。

荒尾市の土地売り出しのクジに当たり、ミユキさんの姉婿が大山さんだった。その人の尽力でなんとか家は出来上がった。

昭和五十二年十月、転居した。光山さんは、八幡台に転居すると、臨時の仕事に出た。荒尾市内をバイクでまわる集金の仕事である。家の借金を返済するために必要だったのだ。この仕事も、最近のうちに耳鳴りや不眠が長く続くならやめなければならぬ。

## 初心に帰れ

「今でもよく憶えています。爆発直後の救出にいく時、申し訳ないことをした。何回も繰り返していった。みんなの力なしには再建できない。最初の一歩は、私たちが踏んでいく。月日が経つにつれ、責任の重みは、死んだ人、残された人、患者も家族も、今なお苦しんでいるのですから……」

「頭痛と不眠」

万田訓練所で機能回復訓練をしながら治療した。しかし、頭痛、耳鳴り、不眠は予期せぬ時に襲ってくる。今も八幡台内にある医院から薬をもらっている。